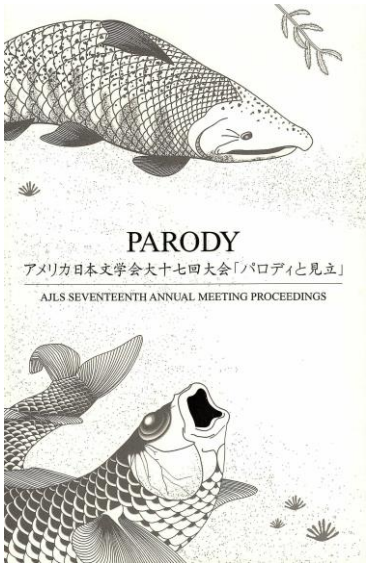
「江戸時代の見立（みたて）とパロディ―
―地口絵本を中心に―」
“Edo-Period *Mitate* and Parody: Focusing on Joke Picture-Books”

Yamashita Noriko 山下則子

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 10 (2009): 2–15.



PAJLS 10:
Parody.
Ed. Sharalyn Orbaugh and Joshua S. Mostow.

江戸時代の見立（みたて）とパロディ―
―地口絵本を中心に―
EDO-PERIOD *MITATE* AND PARODY: FOCUSING ON JOKE PICTURE-BOOKS

山下則子
Yamashita Noriko

国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature

こんばんわ。国文学研究資料館の山下則子と申します。本日は British Columbia 大学の Association for Japanese Literary Studies にお招きいただきましたこと、いろいろとご準備下さったジョシア・モストウ先生、シャラリン・オルバー先生をはじめとする多くのスタッフの皆様に、心より御礼申し上げます。

今回お話しすることは、江戸時代の見立（みたて）とパロディについてです。実はここへ来る少し前に、新聞を賑わしたＣＭがあります。それは日本のイーモバイルのＣＭで、携帯電話をイーモバイルのものに「Change！」しよう、と猿が叫んでいる作品なのです。このＣＭは、すぐに「アフリカ系への人種差別ではないか」と抗議されて、放映を止め、駅に貼ってあった広告ポスターもはずしてしまったそうです。アメリカでは、オバマ候補を猿に喩えた、人種差別に基づく悪質なパロディと思われたようです。しかし、私はこれは、「Change」のみが共通する「見立（みたて）」であり、人種差別や悪意はないものと思います。ただ、この会社がＣＭに使っていたマスコットキャラクターとはいえ、猿を主人公に使ったのでは「人種差別」と言われても仕方なく、大変軽率であったと思います。かなり昔から、アンディ・ウォーホールのように、日本のＣＭを観ている人は世界中にいるのだ、ということを、日本人自身は自覚していないのです。8 月 12 日の朝日新聞では、日本人の国際感覚のなさを厳しく反省するとともに、日本とアメリカとの感覚の違いについても触れていました。いちはやく、このＣＭをめぐる騒動を報じたイギリスでも、「人種差別という見方もあるが、この猿は企業マスコットであり、差別意図は見られない」と指摘したようです。例えば猿は止めて、携帯電話機が「Change！」と叫んでいるＣＭを作ったら、これは日本独特のユーモアある表現様式である、と説明できるはずです。つまり、イーモバイルのＣＭは、オバマ候補を猿に喩えているのではなく、「Change」というイーモバイルの主張を、オバマ候補の選挙の仕方に見立てたものと考えられます。「見立」というのは、何か一つ共通するものがあって、それ以外の部分は全く違うものを重ねてイメージさせ、その落差を楽しむものです。この場合、共通しているのは

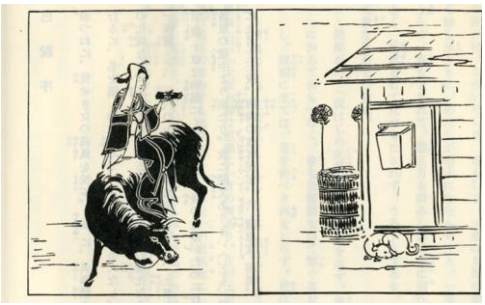
「Change」です。実は日本には、こうした馬鹿馬鹿しいような、ユーモアあふれる表現を楽しむ傾向が、現在でもあります。私が 2 年前に国文研で「見立・やつし」プロジェクトの展示会とシンポジウムを開催した時、私たち関係者が予想もしなかったほど、この展示会には観客が入りました。国文研で今まで開催した展示会の中でも、最も多くの人が入った展示会の一つだろうと思います。しかも、あまり宣伝もしていないのです。つまり現代でも、このユーモアあふれる表現は、多くの日本人が大変好むものだということなのです。

ところで、こうした「見立」やユーモアあふれる表現が一番盛んだったのは、やはり江戸時代の戯作（げさく）です。戯作とは、宝暦・明和期（1751-1771）に、知識人達が通俗的な文学を作る時に生まれた様式で、その後さらに大衆的に広がっていったものです。

パロディとは何か。日本の辞書には、パロディとは「文学作品の一形式。有名な文学作品の文体や韻律（いんりつ）を模し、全く反する内容を読み込んで滑稽化・諷刺化した文学。わが国の替え歌・狂歌などもこの類」（『広辞苑』）、「既存の作品の文体や語句、韻律などの特徴を模して、全く別の意図のもとに滑稽や諷刺、諧謔（かいぎゃく）、教訓などを目的として作りかえた文学などの作品。もじり」（『日本国語大辞典』）とあります。つまり既に確立された、一定した価値のある作品を滑稽にもじることであり、しかも諷刺という、作者の批判精神がどこかに反映したものが、最も正しい意味での「パロディ」だろうと思うのです。

江戸時代の戯作に、そうした諷刺を含む作品があったかというと、その批判精神のありよう、「諷刺」という言葉に値するような迫力が、その作者にあるかどうかの問題はありますが、初期の洒落本、談義本、平賀源内の作品、寛政の改革を題材にした黄表紙などが風刺文学と言われています。これらは初期戯作の中の典型的な作品です。

洒落本『跖婦人伝（せきふじんでん）』（寛延 2 年序・1749、宝暦 3 年刊・1753、梅溝の泥郎（でいろう）〈山岡浚明（まつあけ）〉著）は、吉原の最高の太夫高尾と、最下級の売春婦である夜鷹（よたか）のお跖とが色道を論争する内容で、表面ばかりとりつくろわねばならぬ吉原の太夫よりも、夜鷹の方が真の色道を心得ているという、吉原への諷刺です。しかし実は吉原のみの諷刺ではなく、当時の身分制社会、実力の反映されない社会に対する諷刺があると思われます。本文は、『荘子』外篇の「盗跖（とうせき）篇」で大盗賊盗跖が孔子を逃げ帰らせる話と、『老子』をふまえたパロディになっています。ですから、盗跖ならぬ夜鷹のお跖という名前ですし、挿絵も老子のようにお跖が牛に乗っています（図版 1）。本文には「色道すたれて、物日（ものび）あり。間夫（まぶ）出来て、仇（あだ）ぼれあり。大尽（だいじん）ふもてにして、くるめ有。内證昏乱（ないしょうこんらん）して、心中（しんじ



図版 1

う）あり」とあります。これは、『老子』の「大道（たいどう）廃れて、仁義（じんぎ）あり。智恵出でて大偽（たいぎ）あり。六親（りくしん）和せずして、孝慈（こうじ）あり。国家昏乱（こんらん）して、忠臣あり」のパロディです。『老子』の意味は、「道が廃れたために、仁義という次善（じぜん）のものが説かれるようになった。智恵ある者が出てきたために、ひどい偽りが行われるようになった。一族が不和になったために、親孝行者が目立つようになった。国家が昏乱したので、忠臣が目立つようになった」というものです。それが全て遊里でのことに置き換えられ、この意味は「色道が廃れたので、物日という、遊女が必ず客を取らねばならない、値段の高い日ができた。遊女に恋人ができたので、金目当てで客に惚れたふりをする。金持ち客はもてないので、ごまかして機嫌を取るようにする。経済事情が昏乱したために、心中するのである」とあります。

談義本『当世下手談義』（いまようへただんぎ）（宝暦 2 年刊・1752、静観房好阿（せいかんぼうこうあ）著）は、その時代の風俗を細かく描写することによって、諷刺性や教訓性を持った作品です。例えば、当時の言葉遣いや衣服の流行、豊後節の流行など、苦々しい筆致で次のように書かれています。「浄留理より、身ぶりを第一とまなび、小したゝるい風俗して、飛あるく輩（やから）もおほく、あまつさへ女があられもなひ、羽織着て脇差（わきざし）迄さした奴も、折節（おりふし）見ゆるぞかし。…かの羽織着る娘子ども、三十年已（い）前迄、聞もおよばぬ言葉づかい。「見ない」〔ご覧なさいの意味〕、「きない」〔いらっしゃい〕、「よしな」〔止めなさい〕、なんどゝ舌をなやしてぬかしおるいやらしさ」つまり、浄瑠璃の一種である豊後節の流行にともない、男性が甘ったるい風俗をし、女性が羽織や脇差しをさして、男性的な格好をして、乱暴な言葉遣いをしている、ということです。

平賀源内作『根南志具佐（ねなしぐさ）』宝暦 13 年刊・1763、風来山人著）には、当時の医者が漢詩文に偏り医術の実力のないことを「近年の医者どもは、切つぎ普請（ぶしん）の詩文章で書きおぼえへ、所まだらに傷寒論（しょうかんろん）の会が一ぺん通り済（すむ）やすまずに、自（みずから）古方家或は儒医（じゅい）などゝは名乗れども、病

は見えず薬は覚えず、漫（みだり）に石膏（せきこう）・亡消（ぼうしょう）の類を用て殺（ころす）ゆゑ…」と批判しています。

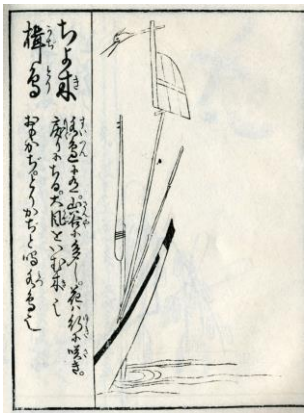
黄表紙『孔子縞時藍染（こうしじまときにあいぞめ）』（寛政元年刊・1789、北尾政演画、山東京伝作）は、寛政改革により、朱子学奨励策ですっかり人心が改まった世の中を描いています（図版２）。物貰いなどまでが、礼（れい）を好むようになり、橋の上で『論語』等をめぐって、珍注釈を加える話となって、先生の乞食が「左伝に『匹夫（ひつぷ）罪なし。璧（たま）を懐（いだ）いて罪あり』とあれば、この方どものやうなしやわせな身のうへはござらぬ」というと、弟子の乞食が「時に先生、『逝（ゆ）く者は斯（か）くの如きか、昼夜（ちゅうや）を舎（す）てず』とは、物日をきりかけられた客のことかね」と、孔子が水の流れを見て、自分の老齢にいたる感慨を述べた言葉を、遊女に「物日に夜昼ともに揚げ詰めにして」と頼まれた客のことと変な解釈をしています。或いは「足下はゆふべ、はきだめの中におやすみなされたか」などと、漢学の書生言葉で話しています。

図版 2

これらの作品は、「うがち・穴・癖・悪口」といった戯作の表現様式を持つ諷刺文学です。そして、中村幸彦氏の『戯作論』によると、戯作とは宝暦、明和期（1751-71）に、知識人が通俗文学を作った際に用いた遁辞（とんじ）（責任逃れのための言葉、逃げ口上）から発生した言葉であって、それが安永・天明期（1772-88）に、新様式として確立流行したものです。中村氏は、戯作の中の文人趣味つまり世襲（せしゅう）制度で生まれた時から決まっている本業以外に、余技として学芸に遊び、個性を発揮するような傾向と、離世（りせい）的姿勢つまり、不満足な現実と、人格と教養に相応した理想との間隔（かんかく）を適当に保ちつつ、自己表現を行おうとする姿勢とが戯作の精神であるとしています。要するにこれらの作品が戯作である以上、近代的な感覚から言うと、人生に真剣に向き合っていないような、斜に構えているような態度であることは免（まぬが）れないのであり、戯作でいくら世相諷刺をしても、最終的には作者は武士としての日常生活は捨てないのです。もっとも『跖婦人伝』を書いた泥郎子（でいろうし）こと山岡浚明（やまおかまつあけ）は、賀茂真淵（かものまぶち）門下の国学者で幕臣であっ

たのですが、実名を隠して出版したにも関わらず、その後の出世は絶たれたようです。風来山人こと平賀源内は、自ら浪人を願い出て、風刺的な戯作や本草学（ほんぞうがく）、果ては鉱山調査にまで活躍し、しかし、まるで自滅するかのように誤って人を殺し、牢死します。山東京伝ですら、寛政の改革では、洒落本 3 部作の作者として、罰せられています。彼らの作品を、遊戯的、高踏（こうとう）的といって諷刺文学と認めないのは、近代文学の感覚で江戸時代の文学を価値づけてしまうことになると思います。

戯作が生まれた宝暦始め頃、つまり 1750 年頃には、「見立絵本（みたてえほん）」も生まれ、その後さまざまな見立ての作品が登場しました。「見立」とは、あるものを、別のあるものでなぞらえて表すことであり、異なるものを連想で結びつける表現です。そして、「見立」は戯作の趣向として、特にきわだった形式であり、パロディと重なる場合もあるし、重ならない時もあります。さまざまな見立の作品を紹介します。



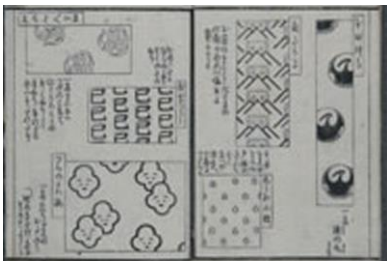
図版 3

『絵本見立百化鳥（えほんみたてひゃっかちょう）』（宝暦 5 年刊・1755、山本亀成作、漕川小舟（ぎちかわしょうしゅう）画、江戸、万屋泉屋合版）（図版３）は、いろいろな器材を木と鳥に見立て、こじつけの説明文を加えたものです。「ちよ木　水辺（すいへん）に有。山谷（さんや）に多し。花は行（ゆき）に咲き。戻りにちる。大風（おおかぜ）をいむ木也　楫鳥（かぢとり）　おもかぢ。とりかぢと鳴水鳥（みづとり）也」とあります。つまり吉原に通うために隅田川を上下した、船足（ふなあし）の速い猪牙舟（ちょきぶね）を、「き」の音から木に見立てたのと、舟の楫取（かじと）りを鳥に見立てたものです。

『挿花故実化（いけばなこじつけ）』（安永 7 年刊・1778、渾沌子（こんとんし）作、海市・木喬画、江戸、山崎金兵衛版）（図版４）は、ある題のもとに様々な道具を花器に見立て、それとの関連をこじつけた花を生けるという設定のものです。例えば左は「梅が枝」という題で、手

図版 4

水鉢（ちょうずばち）に山吹が生けてあります。梅が枝は浄瑠璃『ひらがな盛衰記』に登場する女性で、梶原源太景季（かげすえ）の腰元で恋人でした。勘当された景季のために遊女となり、しかも景季の鎧を取り戻すお金を得ようと、「無間（むげん）の鐘」の伝説に倣（なら）って手水鉢を無間の鐘に見立てて柄杓（ひしゃく）で打つ所が有名です。歌舞伎でも女方の演技の見せ場として、何度も演じられています。それで、手水鉢に山吹（やまぶき）を生けています。山吹とは、山吹色が小判を表すことから、お金のことです。こちらには、朝鮮の弘慶子（こうけいし）の薬売りを題にした生け花もあります。そしてここまでが、寛政の改革以前の作品です。



図版 5

『小紋雅話（こもんがわ）』（寛政 2 年刊・1790、山東京伝画作、江戸、蔦屋重三郎版）（図版５）は、小紋の模様の見立絵本であり、右端の「本田つる」は、細いちょんまげを粋（いき）に横にした、通人の頭を真上から見た図です。まるで鶴の丸のようで、「一名通の丸とも」と書かれています。左端は「まいまいともえ」で、カタツムリが三匹巴文（ともえもん）の形に描かれています。かたつむりのことを、まいまいつぶり・まいまいつぶれとも言います。そして「一名まいないつぶれと云て、ひところことの外はやりしもやうなれども、今はすたれたり」とあります。まいないとは賄賂（わいろ）のことであり、4 年前に老中を罷免された田沼意次の賄賂政治のことを諷刺しています。この例は、さすがに山東京伝の画作だけあって、「見立」とパロディが一致している例です。

図版 6

『魚尽役者評判記』（弘化 4 年刊・1847、画工未詳、江戸、版元未詳）は（図版６）、今までの見立作品から 50 年ほど時代が下り、天保改革の後の作品です。これは、一枚刷りの役者評判記で、役者を全て魚に見立て、その見立てた理由が狂歌で書かれています。例えば右上の端は海老に見立てられた 8 代目市川團十郎で、評は「春霞（はるがすみ）たなびき渡る筋くまは　代々海老でしめる親玉　大上上吉」。「しめる」とは「人気を取る」という意味です。市川團十郎は江戸のシンボルでしたから、「親玉」と呼ばれていました。その隣は、團十郎の女房役者とも言われた初代坂東しうかで、白魚に見立てられ、「品も良く肌透き通る優姿（やさすがた）お江戸の花と歌ふ白魚　大上上吉」とあります。当時は隅田川で白魚が捕れていたのです。この中で最高の評判だったのは、3 代目尾上菊五郎の鯨と、4 代目中村歌右衛門の鯛です。

図版 7

『擬五行尽之内（なぞらえごぎょうづくし）之内　白魚舟（しらうおぶね）の篝火（かがりび）』（嘉永 5 年 8 月・1852・改印、3 代目歌川豊国画、江戸、恵比寿屋庄七版）は（図版 7）、中国の五行説つまり木火土金水に、関係の深い文学・演劇から取材した人物を見立て、その登場人物に相応しい歌舞伎役者を見立てて描いています。つまり 2 段階の見立

てになっているわけです。この「白魚舟の篝火」は、松若丸（まつわかまる）に見立てられています。松若丸というのは、能『隅田川』で、人買いに殺されてしまった梅若丸の双子の弟として、近松門左衛門の浄瑠璃『双生（ふたご）隅田川』などに登場する人物で、時代に応じて様々な変化をします。この絵が直接取材している歌舞伎『隅田川花御所染（すみだがわはなのごしょぞめ）』では、天下をとろうと別の人物になりすまし、その婚約者である桜姫と、もともと自分の婚約者であった、姉の花子（花子は松若丸が死んだと思って出家し、清玄尼となっています）との、姉妹の女性達に愛される色男です。描かれているのは、8 代目市川團十郎で、当時女性に圧倒的に人気がありました。そして、この歌舞伎で最も評判を取ったのはこの隅田川の場面で、京都から江戸に放浪した清玄尼つまり花子は、白魚漁をしている松若丸と舟ですれ違います。歌舞伎舞台の上で実際に舟ですれ違うのです。白魚は、夜に篝火をたいて集まったところを捕ります。だから、篝火の火で松若丸という見立です。向こうに半分見えているのは、三囲（みめぐり）神社の鳥居で、これが隅田川であることを表しています。

図版 8

『見立三十六歌撰之内　恋しさは　おなし心にあらずとも　こよひの月を君見ざらめや　朝きり』（嘉永 5 年 11 月・1852・改印、3 代目歌川豊国画、江戸、伊勢屋兼吉版）は（図版 8）、三十六歌仙の歌を文学や演劇に登場する人物に見立てています。この場合は、柳亭種彦作の合巻『偐紫田舎源氏（にせむらさきいなかげんじ）』に登場する朝霧、つまり『源氏物語』の明石の上を当世化した人物です。源信明（みなもとのさねあきら）朝臣の歌の意味は、「相手を恋するという点では、あなたは私と同じでなくても、今宵の月を私と同様に、心ひかれてあなたも見ていないはずはなかろう。せめて、それだけでも同じ心だと思うとうれしい」という片思いを表します。朝霧は、自分の許へ通ってくる足利光氏（光源氏を当世化した人物）との、身分の不釣り合いを気にしています。そして、田舎育ちの自分を都で生まれ育った光氏に比較して卑下し

ています。朝霧が光氏と始めて契りを交わしたのは、月の輝く夜でした。図版にも明石の浦の有名な月が描かれています。つまりこの絵は、和歌の「恋しさは同じ心にあらずとも」や「月」を朝霧に見立てているのです。描かれている役者は 3 代目市川門之助で、この絵が描かれる 28 年前に、病死しています。この絵は、門之助への追善（死者の霊を慰めること）のつもりで、描かれたものと思われます。

さて、口合（くちあい）・地口（じぐち）とは、言葉の上での見立てです。つまりよく知られた成句（せいく）、それは古い歌やことわざ、謡曲、俗曲等の一節であったりするのですが、それを、類似した音の別の言葉で言い換え、別の意味にすりかえて笑いをとる洒落の手法です。上方では口合、江戸で地口と言います。音の共通から、全く違う意味にしてしまうので、言語上の「見立」と考えられます。例えば「　獅子（しし）よ母よとなく声（父よ母よとなく声）」「鼬（いたち）はすきなり御意はよし（諺の「下地は好きなり御意はよし」つまりもともと好きなことを、人に勧められるという意味）」（『穿当珍話（せんとうちんわ）』宝暦 6 年刊・1756、大坂）のようなものです。やはり戯作と同様に宝暦頃から本として出版されるようになります。ただし言語遊戯としての口合は、まずは雑俳（ざっぱい）の世界において発生し、享保期（1716-35）頃に「言葉の洒落」という意味で使われ出しました。子供向けとされる絵本や草双紙の地口本はありましたが、あまり多くはなく、天保の改革以降に盛んになったものです。地口に絵を添えたものも、やはり天保期から盛んになり、特に地口行燈という、お祭りの時に行燈に絵入りで地口を書いたものを飾ることがはやったために、その絵手本としての絵入りの地口本が、弘化・嘉永期（1844-53）に多く作られました。

図版 9

『神事行燈（しんじあんどん）　4 篇』（天保 13 年刊・1842、歌川国直画、名古屋、永楽屋東四郎版）は（図版 9）、地口行燈の絵手本とも

言うべき作品です。畑の道をお酒を呑みながら歩くお爺さんが描かれ「あぜは　造酒連菜（みきつれな）ははたけ」と書かれています。これは諺の「旅は道連れ世は情け」つまり、一人ではなにかと不安な旅行でも、一緒に歩く人がいれば心強い、という意味の諺の地口です。下は、肥（こえ）だめつまり農作物の肥料にするために、人糞（じんぷん）などを溜めておくもので、その肥だめから肥料を汲んでいる男が描かれ「こひはくめども姿は見へぬ」とあります。これも諺の「声はすれども姿は見へぬ」つまり、声は聞こえるけれど、姿が見えないという意味の諺の地口です。次は稲が実った田んぼを見ている人が描かれ、「新田（しんでん）わづか　小豊年（こほうねん）」と書かれています。これは諺の「人間わずか五十年」つまり、人間の寿命はたかだか五十年である。人生は短いということの地口です。

図版 10

『百人一首地口絵手本』（明治元年頃刊・1867、梅亭樵父画作、東京、須原屋版）は、少し変わった作品で（図版 10）、百人一首の下の句を地口にしたものです。これは「碁（ご）をうちやめて昼は食ふなり」。喜撰法師の「わが庵は都のたつみしかぞ住む　世を宇治山と人はいふなり」の下の句の地口です。こちらは「ばかに雪ふる長寝（ながね）せし間に」で、雪を大きな玉にした前で、歯を磨いている図です。これは小野小町の「花の色は移りにけりないたづらに　わが身よにふるながめせし間に」の下の句の地口になっています。

図版 11

黒本『〔ぢぐち〕』（明和年間か・1764-71、富川房信画、江戸、鶴屋版）は、絵師の富川房信の活躍時期から、明和期の作品と思われ、かなり珍しいものです（図版 11）。江戸の草双紙形態の地口絵本で、地口作品の中では初期のものです。蛤（はまぐり）がお辞儀をしている「時宜（じぎ）はまぐり」は、もともとは「鴫蛤（しぎはまぐり）」のことで、近松作の浄瑠璃『国性爺合戦（こくせんやがっせん）』で、主人公の和唐内（わとうない）が、浜辺で鴫蛤の戦いを見て、中国へ渡り明清の戦いに加わる決意をする重要なところです。風呂屋から出てきた「朝湯（あさゆ）なの三郎（さむらふ）」は、朝比奈（あさひな）の三郎のことで、曽我兄弟の仇討ちを援助する小林朝比奈です。『曽我物語』で曾我兄弟に同情する鎌倉武士として描かれ、五郎と鎧の草摺を引き合う場面があるので、歌舞伎の曽我ものには必ず登場します。「蟹さかやき」は「髪月代（かみさかやき）」の地口で、髪を結い月代を剃ることです。「書出（かきだ）し五郎」は、駆け出し五郎のことで、これも歌舞伎の曽我ものの一つである『矢の根』のことです。曽我五郎がお正月の吉例として、矢の根を研ぎ、眠ると、夢に兄の十郎が敵工藤祐経の虜になっていると告げます。五郎は兄を救おうと、初荷の大根を積んだ裸馬（はだかうま）にうち乗り駆け出します。

図版 12

次の（図版 12）「烏賊（いか）みもろはく」は、イカが茶店でお酒を飲んでいますが、お酒の伊丹諸白（いたみもろはく）、つまり当時兵庫県で醸造した上等なお酒の地口です。「鬼（おに）に花棒（はなぼう）」は現在も使う諺の鬼に金棒（かなぼう）、つまり強い者に、さらに強みを加えることの地口です。長屋の木戸で番をしている「夜番（よばん）たゞのぶ」は、碁盤（ごばん）忠信の地口。源義経の家臣佐藤忠信は、義経の吉野落ちで奮戦したことで有名で、『義経千本桜』では狐忠信が主人公として活躍しますが、忠信が碁盤を振り回して戦ったという伝説を生みました。それで碁盤を振り回して戦う歌舞伎を、碁盤忠信と呼ぶようになったのです。次の恵比寿様がお遍路さんのように諸国を廻る様子をしている「ゑびす廻国（くわいこく）」は、　恵比寿大黒（えびすだいこく）の地口で。どちらも日本の神様です。「恵比寿大黒」という

狂言もあります。当時の商人の神棚には、恵比寿様と大黒様が飾ってありました。

図版 13

次の（図版 13）　閻魔（えんま）様に三途川（さんずがわ）の　奪衣姿（だつえば）が、味な身振りで寄り添う「ゑんまいなもの」は、諺の縁（えん）は異（い）なもの、つまり男女が結ばれる縁は、理屈ではわからない不思議なものであるという意味の諺の地口です。閻魔は地獄の王様で、奪衣婆は冥土へ渡る三途川で衣服をはぎ取る老婆の鬼です。この図はどちらの意味も踏まえています。蚊帳（かや）の前で大あくびをしている図は、「あくびふんばり大音（だいおん）あげ」。これは、『平家物語』などの軍記物語によく出てきますが「鐙踏（あぶみふ）んばり、大音あげ」の地口で、馬に乗って足を乗せるところの鐙を踏ん張って大声を出して、「やあやあ我こそは」と名乗りをあげる場面でよく使われています。

さて、このように図版 3 以降の「見立」の滑稽さは、最初に引用した初期戯作の風刺文学とは、その性格がかなり違うことに気づかれるでしょう。つまり「見立」とは、表現の仕方に重心があり、諷刺的な要素はあまり感じられない滑稽さです。いわゆるパロディの滑稽さとは違うものなのです。ただ、初期戯作の知的な諷刺文学は、時代が下るにつれて大衆化していきます。地方から江戸へ入ってくる人々が増え、文化の質が変化して、学問的背景のある人しかわからないような諷刺や滑稽さは受け入れられなくなったからです。また前期戯作とは違って、職業作家が商品として戯作を作るようになり、売れ行きを考えなければならなくなりました。加えて、寛政改革、天保改革で、諷刺的な滑稽を描くことは、ほぼ不可能になったと思われます。ですから後期戯作には、諷刺性は薄らぎます。それでは江戸時代の文芸には、諷刺がないのかというと、出版という形態をとらず、作者もわからないような落書、落首に、それはたくさんあります。

「落首」とは　落書（らくしょ）つまり、平安末期から中世にかけて、告発等のために行われた無記名の投書がその早いものです。その落書の一種で、和歌・狂歌形式のものをいいます。江戸時代には、落書・

落首が膨大に作られた時代で、平和な中でも言論統制の厳しかった時代に、こうした形で鬱憤（うつぷん）を晴らしていたことがよくわかります。江戸時代全体を通して多くの落首が作られていますが、寛政改革前後の、田沼意次（たぬまおきつぐ）・意知（おきとも）の落首は非常に多いです。まずは、「天明にかなふ田沼の御養君　御用がゝりは御加増のたね」。これは、一橋家の嫡子を御用かかりとして将軍の養子にし、田沼意次は一万石加増されました。意次の弟で一橋家の家老の能登守は、江戸城西丸奥勤となったことを言っています。次の「田沼子（たぬまこ）のとるも取らぬも切られては　しぬも死なぬもあふ事の席」これは百人一首の蝉丸の歌「これやこの行くも帰るも別れては　知るも知らぬも逢坂の関」をもじったもので、「これやこの」を「田沼子の」としたのはかなり苦しいですが、田沼意次の息子の意知のことです。天明 4 年、若年寄にまで出世していた田沼意知は、佐野善左衛門に江戸城で斬りつけられて死ぬという事件がありました。「大事（おおごと）」の席が事件の大きさを表しています。次の「駒あれて孫うち落すかげもなし佐野のたゝりと人の夕ぐれ」は、『新古今集』藤原定家の歌「駒とめて袖うちはらふかげもなし　佐野のわたりの雪の夕暮れ」をもじったもので、田沼意次の孫が落馬したことを、佐野善左衛門の祟りだと人々が言っているという意味です。そして天明 6 年に老中を罷免された田沼に代わり、翌年に松平定信が老中になります。賄賂政治は粛正され、「このほどは武士もとりあへずかはり山　粗服（そふく）の勧め上（かみ）のまにまに」。これは菅原道真の「この度はぬさもとりあへず手向山　紅葉の錦　神のまにまに」のもじりです。しかし、あまりにも細かく厳しい定信の政治には、徐々に批判が出るようになります。次の「世の中に蚊ほどうるさきものはなし　ぶんぶ（文武）というて身を責めるなり」は、とても有名です。定信の文武奨励策の強行ぶりを皮肉った歌で、人口に膾炙しました。そしてこの歌や次の「孫の手のかゆひ所へとゞきすぎ　足のうらまでかきさがすなり」は、四方赤良（よものあから）つまり大田南畝（おおたなんぽ）の作という噂が広まりました。南畝自身は否定していますが、真相はわかりません。そしてこの赤良の落首事件がひきがねとなり、天明狂歌は終焉してしまいます。事件後狂歌は、和歌的な優雅なものであろうとし、軽妙洒脱な持ち味を失い衰退していくのです。落首を詠むことは、狂歌の世界では厳しく避けられていました。落首が権力者からにらまれるという実際的な理由もありましょうが、狂歌が戯作だから、現実から少し離れた感覚で作らなければならない、ということでしょう。落首の諷刺は、直接的であるために、波紋と緊張を強いるのです。

後期戯作に諷刺性があまり見られないのは、天保改革などの外的圧力のみが理由なのではなく、戯作がもともと持っていた文人趣味や現実から少し離れて世を送るような属性に、原因があると思います。そして、そういう鋭い現実批判を含まない滑稽さというものは、現在あまり高い

評価を受けません。しかし江戸時代は平和な時代でした。平和な時代にその平和を保ちつつ、秩序を維持して生活していくには、実はかなりのストレスが生じ、工夫が必要なのではないかと思われます。これらの無意味ではあるけれども平和な笑いは、身分制度で厳しく律せられていた時代、ほんの少しだけ、のびやかな、精神的な自由さを味わわせてくれたのではないかと思います。

これで発表を終わります。どうもありがとうございました。